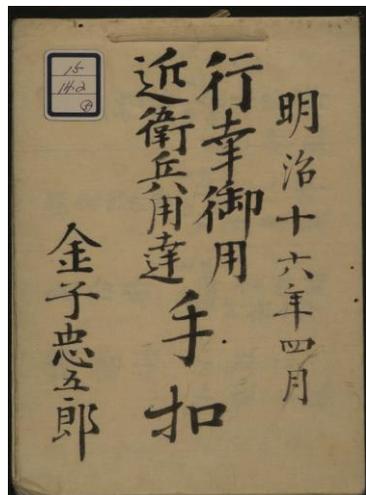
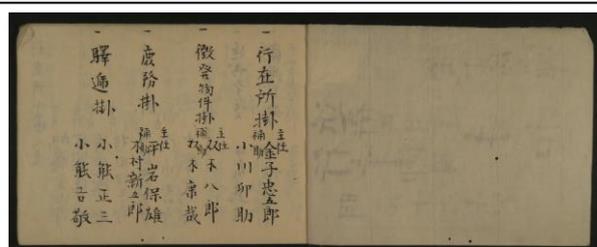


行幸御用の手控

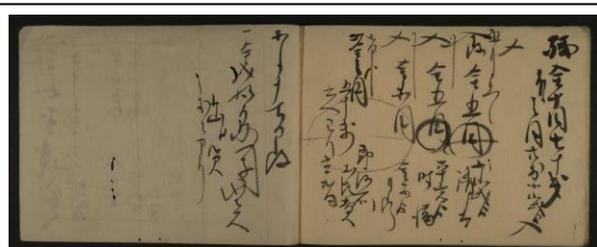
尾崎 泰弘



表紙



丁寧に楷書で書かれている部分



文字が大きく、くずしが著しい部分

この文書は、たて 17.4 cm、よこ 12.6 cmの大きさで、半紙の短辺を二つ折にして 5 枚重ね、その長辺をさらに半分に折って紙縫(こより)で綴じています。全部で 10 丁、20 ページ分文字を書くことができます。表紙を見ますと「明治十六年四月 行幸御用近衛兵用達手控(控)」とタイトルが記され、左に「金子忠五郎」と使用者の名前が記されます。これは、明治 16(1883)年 4 月 18・19 日に飯能町や精明村などで行われた近衛諸隊の春季小演習を統監するため、明治天皇が飯能町に行幸した際の記録であり、金子忠五郎家は、当時飯能を代表する商家であ

ったことにより明治天皇の行在所(宿舎)となったと考えられ、忠五郎は「行在所掛(がかり)主任」の立場にありました。

ところでこの帳面は非常にコンパクトですが、これは懐(ふところ)などに入れて持ち歩きやすいようにするためです。中を見ていきますと最初は楷書で丁寧に記されていますが、書き進むにつれ、文字も大きくなり、またくずしも著しくなっています。そこから現場でささっと書きとめた様子をうかがうことができます。「手控(てびかえ)」とはいわば携帯用のメモ用紙のようなものといえ、その記載の中には、後日まとめられたり、別の帳面に清書されたりしたものもあったことでしょう。

この演習に参加したのは、近衛歩兵第一・第二連隊、砲兵大隊、騎兵中隊、工兵中隊で、4 月 1 日以降に漸次東京を出発し、埼玉県下で行軍及び演習を行っていました。少なくとも 4 月 18 日には、明治天皇が飯能行在所に入ると合わせて、これらの兵士たちも飯能の町に駐屯し、観音寺や能仁寺などの寺院のほか、町の商家などに分宿していました。残念ながら現在当館で所蔵している記録は断片的なため全体像はわかりませんが、その数は少なくとも 2000 人近くにはなったようです。また「蒲団(ふとん)損料」が飯能町だけでなく現在の加治地区、精明地区の村々にも支払われていることから、周辺の村々もこの演習に協力していたことがわかり、こうした記録からは行幸が地域に与えた影響を知ることができます。飯能の町の人たちはどのような思いで明治天皇の行列を迎えたのでしょうか。

【参考文献】

飯能市史編集委員会『飯能市史』資料編Ⅳ 行政二 飯能市 昭和 59(1984)年 1 月

田無市史編集委員会『田無市史』第三巻 通史編 田無市企画部市史編さん室 平成 7(1995)年 1 月